

# モルモット飼育モデル校事業にかかわって

稲葉大輔

## はじめに

平成 25 年より福井県では小学校でモルモット飼育を実践してもらおうと「学校飼育動物モデル校」事業を立ち上げ、今までに県内の多くの小学校がこの事業に参加しています。

簡単にこの事業内容をご説明しますと、小学校でモルモットを飼育してもらおうモデル校を募集します。この事業に参加を表明してくれた小学校に福井県獣医師会が生まれて 2 ヶ月ほどのモルモットを提供します。併せて飼育ケージ、餌となるペレットとチモシーも定期的提供します。飼育の仕方はもちろんのこと、日頃の接し方についても小学校に赴き、「ふれあい教室」と題して子どもたちに指導します。このモルモットに診察や治療が必要となれば獣医師会の会員である担当病院がそれを担います。また週末や長期休暇に備えて、子どもたちの保護者を対象に「ホームステイ説明会」も実施し、子どもたちの自宅での一時飼育の実践に援助いたします。これらにかかわる費用は獣医師会で負担するため、学校側は概ね無料にてモルモットを飼育することができます。

この事業は昨今の低迷する学校飼育動物に対して、子どもたちに動物と触れ合う機会を与え、小さな命に対して慈しみの気持ちを育てたいと福井県獣医師会では考え、立ち上げられました。

## 1 「ふれあい教室」1校目

私の担当する福井県坂井市およびあわら市でも今までに 2 校の小学校でモルモットを飼育してもらいました。1校目はあわら市立波松小学校。この事業を開始した平成 25 年からの飼育です。モルモットはモコちゃんとなづけられました。波松小学校は全校児童 20~30 名の複式学級



モコちゃん

の小学校だったことで、飼育担当は全校児童が交代で行いました。小学 1 年生から 6 年生までみんなで一緒にモコちゃんのお世話をするのは、みんなで一緒にお世話することもあって飼育 2 年目には新生に上級生がモコちゃんの抱っこの仕方やお世話の仕方を教えてくれます。

「ふれあい教室」に小学校に出向いて、獣医師として子どもたちに抱っこの仕方を教えようとしてももうすでに子どもたちみんなができていた状態だったりします。授業中騒いでいる 5 年生を「モコちゃんが怖がるからやめて」と 6 年生がたしなめる場面をみることもあり、小さい小学校だからこそみんなでモコちゃんを育てるアットホームな小学校でした。

また、こんなことがありました。ケージ内のお掃除をする時にモコちゃんをどこに移動するかで意見が分かれた時がありました。小さな箱に移して、その間にケージの中を掃除してしまうか、掃除の間だけかがモコちゃんを抱っこして試みるか。子どもたちだけでの話し合いは上級生が意見を通すと思われたのですが、下級生の女の子が「モコちゃんが怖がることなくケージの中を綺麗に出来たらモコちゃんもきっと嬉しいはず」の一

言で、だれかが抱っこしている方式になりました。のちにこの方法では効率的ではないということで小さな箱に移動する方式になってしまいましたが、それでもみんなでモコちゃんの気持ちになって考えたことや、下級生の意見にも上級生がちゃんと耳を傾けたことに、子どもたちが立派に見えました。

小学校の統廃合によりモコちゃんが3歳の時に波松小学校は廃校となってしまい、統合先の北潟小学校にお引越しいという出来事もありましたが、平成25年から30年までの5年間波松小学校と北潟小学校の子どもたちに可愛がられて生きてくれました。亡くなる1ヶ月くらい前から体調管理のために担当教諭の自宅で飼育されていたため、最後は子どもたちに会うことなくひっそりと息を引き取りました。亡くなって数日後、モコちゃんのお葬式である「喪の授業」を小学校で行いました。モコちゃんの亡骸を見てシクシク泣いてしまう子もいましたが、小学校の先生方が在りし日のモコちゃんの写真をスライドショーにしてくれて、それを見ながらみんなと一緒に元気に過ごしたモコちゃんとの思い出を語り合い、笑いあい、笑顔でモコちゃんを見送れた「喪の授業」でした。モコちゃんの遺体は小学校の先生方の希望から火葬され骨になり、小学校のグラウンドの片隅に埋葬されました。植樹もされたそうです。

なお波松小学校の運動会に名物が生まれました。「モコちゃんリレー」といってバトンの代わりにモルモットの着ぐるみで走るそうです。次の走者は前の走者から着ぐるみを受け取り、そしてそれを着て走るとか。一度見てみたかったです。

## 2 「ふれあい教室」2校目

2校目は坂井市立木部小学校のモルモット、ミルクちゃんです。平成28年からの飼育で、現在4歳になりました。小学校の児童数は1学年10～20名ほどで各学年1クラスずつの規模です。毎年2年生が飼育担当で、例年春に次の学年に飼育が引き継がれます。飼育開始時に我々の行う「ふれあい教室」の中で新2年生が新3年生からお世話の仕方を教えてもら

い、さらに獣医師の指導のもと実際に触れ合ったり抱っこしてみたりします。声をそろえて「可愛い」と言ってくれる2年生、しかし実際のところミルクちゃんどう接してよいものか分からず、お世話となると抱っこの仕方もおどおど、急に動けば一喜一憂、担任の先生の力を借りなければ十分なお世話はこなせない…。そうそう、最初はそんなもんです。それでもクラスみんなで協力して少しずつ触れ合い方を考えて、ミルクちゃんとの関係をうまく築いていく。毎年の光景です。1ヶ月もすればクラスみんなが上手にミルクちゃんを抱っこしたりお世話したりできるようになります。

## 3 道徳の授業での活用

この小学校でずっとミルクちゃんの担当をしている先生がいらっしゃいます。50代の女性教諭M先生。M先生は動物を自宅でも飼ったことがなかったわけですが、子どもたちのために学校でモルモットを飼ってみたいと、我々のモデル校募集に参加を表明していただけました。初めてミルクちゃんを木部小学校に連れて行った時から、子どもたちと一緒にモルモットの生態を肌で感じ、その可愛らしさに魅了されたようです。先生が一生懸命になってくれたならばこちらとしても歩調を合わせやすいので、ミルクちゃんや子どもたちの様子をお聞きしつつ、先生が次にどんなことに興味を持っているのかを探してみると、日頃の授業でミルクちゃんを題材に何かできないだろうか



ミルクちゃん

という意見が出ました。私からは1～2

年生の生活科で動物の生態としてモデルにしたり、国語の作文の題材にしたりするといったことがよくお聞きすることです、と一般的な話をするくらいしかできなかったのですが、M先生は「道徳の話の題材にもしてみたい」と言われました。確かに小さな命をみんなのお世話で守っていくのは道徳につながると思います。意思の疎通も可能な動物ですから、いじめたりせずに優しく接してあげるとモルモットの方から寄ってきてくれます。そんな毎日を繰り返すことはそれなりに道徳的だと思います。しかし、いざ2年生の子どもたちの授業で直接伝えられることは「ミルクちゃんに優しくしようね」の一言で終わってしまいそうな気がして、私自身はその時はあまりそれ以上のイメージが出来なかったのです。後日M先生に「道徳のことはどうなりましたか」とお聞きしたところ、2年生のクラスでは「ミルクちゃんも見ているよ」を合言葉にいろいろな活動を頑張るようにしたそうです。なるほど、昔から「お天道様が見ている」といって自分を持つことは聞きますが、2年生にとってはもっと身近な、いつもクラスの片隅にいて一緒に授業を受けている「ミルクちゃんも見ている」ということの方が意識しやすかったのでしょうか、学級での活動をなんでも一生懸命行うことに結びやすかったようです。自分自身も頑張る、友達が困っていれば助けてあげる、難しいことはみんなで話し合ってみる。それらを「ミルクちゃんも見ているよ」の合言葉を支えに頑張ってみる。子どもたちの活動のきっかけ作りとしては非常にいいと思われました。その効果を嬉しそうに話をするM先生の横でウンウンと頷くくらいしかできませんでした。他の先生方にも評判だったようで、大変満足されていたM先生の笑顔が印象的でした。

#### 4 壁新聞の作成

毎年モデル校では壁新聞と称して飼っ

ているモルモットを題材に作品を作っ



ミルクちゃんの壁新聞

もらっています。どの小学校も力作で、子どもたちの作文やイラストもたくさん載せてくれます。今年もつい先日木部小学校の作品が担当病院である当院に届きました。今年子どもたちの作文と絵が中心で、「ミルクちゃんの大好きなところ」をテーマに生き生きしたイラストと一緒に書いてくれました。食べている様子が可愛い、寝ている姿が可愛い、くりくりした目で餌を欲しそうにしているなど、たくさんの感想が書いてあります。他のクラスメートと同じようなことを書いている子もいれば、その子だけの感覚で書いている子もいます。子どもたちの感性は本当に豊かですね。同じ話題を自分の考えで書くことでクラス内での共有の意識を芽生えさせているとともに、ミルクちゃんの愛くるしい動きや、話しかけるわけではないですが何かしてほしそうに訴えかけるような仕草が、子どもたちの個性的な感覚を伸ばすことにも一助しているに思えました。

(いなば動物病院)